

理論と実践を融合させた授業の試み —講義「特別活動の研究」を通して—

Attempt of the class that combines theory and practice
—Through the "research of special activities"—

清水 和久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

小学校教員免許取得のための必修科目である「特別活動の研究（初等科）」において、講義の中に演習的な要素を加味したシラバスを作成し実行した。具体的には特別活動の内容の1つである「学級活動」を理解するために、講義の中に係活動やグループ討議を含む班活動を取り入れた。授業後のアンケート調査の結果、係活動やグループ討議などに対する肯定的評価が多く、講義全体の満足度も高かった。アンケート調査の理由からは、班単位の係活動が、授業への参加意識を高め、自ら授業に貢献していると感じていること、また、班単位でのグループ討論により、学生相互の関わりが増え、自分の意見を発言する機会が増えたと感じていることがわかった。このことから係活動やグループ討議を取り入れる事は「特別活動の研究」の授業として有効な手段であることがわかった。

〈キーワード〉

大学教育、授業設計、教授法

1 はじめに

初等教育における特別活動の時間は、集団での学びを経験する場である。したがって、特別活動は学校集団、学級集団、仲間集団の中で展開され、児童生徒の人格形成に大きな影響を与えるものである。⁽¹⁾ 筆者の大学では、前年度までは、「特別活動の研究」は小中高の教員を志望する学生が1つの共通の講義を受講していた。今年度からは初等と中等に分けて実施されることになり、筆者は初等の「特別活動の研究」において学生56名を担当することとなった。

小学校の特別活動は「学級活動」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」の4つに分けられる。学生にとって特別活動は、小学生の時に自らが体験しているものではあるが、「特別活動」の枠組みとしては認識が薄いようである。しかし、学校現場において学級活動は、学級経営の基礎になる部分であり、教材研究が十分であっても学級経営の善し悪しによって授業が大きく左右される。

今年度「特別活動の研究」の講義を受け持つにあたり、受講生が初等教育を志望するものがほとんどであるため小学校に対する興味関心を高めるとともに、実践力としての学級指導力も身につくように、講義の中に班単位での討議活動や係活動を取り入れることとした。

2 研究のねらい

「特別活動」の内容を理解するために、講義の中に学級活動に相当する係活動や班討議を取り入れることで、学生の講義に対する満足度を高め、同時に実践力や対話力を身につけることをねらいとする。

3 研究の方法

係活動の場面、班討議の場面を焦点化して講義に取り入れられる。最後に係活動、班討議に対するアンケート調査を実施する。

3-1 係活動の取り入れ方

3-1-1 係の種類について

特別活動の項目の1つである学級活動を体験するために係活動を班単位で行うこととする。係の種類については、学生からアイディアをつのり、講義の中でも実際にできるもので創造的な活動ができる係という観点で決める。

3-1-2 授業の中での係活動の時間の保証

各係にはなるべく毎回活動できる時間を保証し、授業ごとに仕事があり、学生自身が授業に主体的に参加し、授業を楽しめるような係活動にしたいと考えた。それ故、授業

の中に係活動の時間を保障した。

3-1-3 係活動に対する2つのアプローチ

係活動を2期に分けて行い、前期の係活動は、参加意識を高めるために、同じ係を希望する者同士で班を編制しておこなう。後期の係活動は、くじ引きで班のメンバーを決めた後、班内の話し合いで立候補する係を決め、演説の優劣で係を決定する。

これは前期の班での係活動は「意欲を重視し、活動自体」に焦点を当てるのに対して、後期の班の係活動は、「班内での話し合いと演説による決定プロセスの体験」に焦点を当てているためである。

3-2 班討議の取り入れ方

授業の内容に関して、考えて欲しい内容をまず班内で討議した後、全体場で発表する活動を多く取り入れる。

また、本授業は、昨年度カリキュラムの関係上で受講できなかった3年生の一部と今年受講する2年生の混合のクラスであり、学生同士互いに面識がないため、話し合いにより互いを知り合う機会であるという側面も考慮する。

さらに後期班の話し合いでは、立候補のための係の演説も班の話し合いで考えさせる事とする。

3-3 アンケート調査

授業の評価のために第14回の授業終了後にアンケート調査を行う。内容は下記に示す。

表1 アンケート内容

問1	授業に係活動を取り入れたことは効果的だったか？（6件法）
問2	その理由の記述
問3	前半の係活動を行った感想
問4	後半の係活動決定時での係の演説、ポスター作成した感想
問5	今後とも授業にあったらよいと思う係 現在行っている係から3つ選択
問6	授業にグループ討議を取り入れたことは効果的だったか（6件法）
問7	その理由の記述
問8	講義全体の満足度は高いですか（6件法）
問9	毎回のレポート提出は大変だったか（6件法）
問10	その理由の記述
*なお6件法の選択は、6とてもそう思う、5そう思う、4どちらかと言えばそう思う、3どちらかと言えばそう思わない、2、思わない、1、まったく思わない	
*今回の分析には問3、4は使用しない	

4 研究の結果

4-1 係活動の取り組みについて

4-1-1 係の種類について

学級における当番の仕事と係の仕事の違いは、当番が管理的な仕事で、誰もが公平に分担する仕事であるのに対して、係の仕事は創意工夫の余地があり意欲のある班が分担すべき仕事ととらえている。そのため講義に、より能動的な態度で取り組めるように学生から必要な係についてアイデアを募った。しかし、すべてが創造的な仕事とはならず、当番的な要素を持った係の仕事も出てきた。全員が分担する事を優先し、当番的な仕事も含め9つの係の仕事を提示した。

表2 係活動とその内容

班	係の仕事	内 容
1	黒板電気係	板書を消す
2	号令挨拶係	授業の最初と最後に挨拶の号令をかける
3	配達収集係	提出物の収集、配布をおこなう
4	環境整備係	机の整理、整頓、座席表の作成
5	ボケ係	教師の質問には積極的に答え、なるべく笑いをとる
6	つつこみ係	ボケ係に対するつつこみと、先生が間違えたこと（誤字脱字）に対して指摘する
7	ゲーム係	5分程度の集団遊びを毎回実施する
8	朝の話係	授業前にトピックスを話す
9	新聞係	授業のポイントなどの情報を記載する。

1, 2, 3, 4班の係についてはどちらかというと創意工夫の入る余地はないが、数も必要であるために入れてある。5, 6班の係は、講義中に臨機応変に出場があり、授業の展開に直接関係する係で、授業の盛り上げに関わる重要な役割である。7班のゲーム係は、クラスの間関係を和ませると共に、学生にとって学級活動で使えるゲームの知識を増やすのに役立つ。8班朝の話係は、授業の最初にトピックスを話すことでスピーチの練習の役立つ、9班の新聞係は学級通信の練習となる。

4-1-2 授業の中での係活動の時間の保証について

表3 1回の授業の流れにおける係の活動場面

	内 容	係
1	前回レポートの返却とレジメの配布	配達収集係
2	始業の挨拶の号令	挨拶号令係
3	今日の話	話係
4	前半授業	ボケ・つつこみ係
5	ゲーム	ゲーム係
6	後半授業	ボケ・つつこみ係
7	終了挨拶の号令	挨拶号令係
8	授業後 整理整頓	整理整頓係

新聞係以外は毎回何らかの係の仕事があり、授業に対して参加意識を高めることができたと考えられる。

特にボケ係とつつこみ係はおもしろく、ボケ係は教師の質問に対して、まっさきに答え、なおかつ少しピントをはずして間違っただけで答えるため、他の学生にある意味安心感を与えることになった。またつつこみ係は、そのボケに対して訂正したり、教師の誤字、脱字などにも目を光らせてたりして、他の学生の代弁役となった。ただしこの役は、適性もあり、その係の班全員が行うのは難しかった。

ゲーム係は、ちょうど授業の区切りのいいところで行ってもらった。基本的に係が考えてきたゲームをおこなってもらった。班内の親睦を深めるゲームや、手遊びなどいろいろあり、ゲーム後にねらいなどの解説を言う場合もあった。ちょっとした気分転換にもなり、私自身も楽しみであった。

新聞係からは新聞は結局1回しか発行されなかった。しかし、大学で毎日発行されている「星稜TODAY」をもじり「特活TODAY」という名前で、お勧めの本や、授業の復習、教師へのインタビューなど工夫のあるものであった。



図1 新聞

4-1-3 係活動に対する2つのアプローチ

15回の授業の内、前期班の係活動は2回から9回まで、後期班の係活動は11回から15回までであった。

前期の班活動は、2回目に学級活動のスタートである学級開きの話をしたことを契機に係の希望をとって班活動を始めた。活動に伴って創造力が要求される係など一生懸命取り組む班もある反面、余り活発でない班も出てきた。これは予想通りであった。そもそも他の班の仕事をチェックする機能がないのである。そこで班替えを行うこととした。

後期の班活動では、くじ引きで班員を決めた後、集まった班員で係の仕事の方針を立てるところから体験してもらうことにした。これは、実際の学校現場の学級活動に近づけるためである。班で立候補する係を相談し、方針を立て、班単位で演説した。特にこの演説では、パフォーマンスが求められ、やる気を見せるために班全員で声を合わせるとか、自分たちがこの係をすることでのクラスに対するメリットを強調したものとなった。

係決めでは2つの係に希望が集中したため、演説による多数決で決めることとし、1つの班しか立候補のない係は、演説後の信任投票で決めることとした。この時のレポート課題として、「じゃんけんで係を決めるのは民主的であるか」という課題を与え、演説で係を決めるのはどのような場合が適当かを考えさせた。希望が多い係をじゃんけんで決めることは係の方針の優劣によって選択できないため、ク

ラス全体にとって不利益になる場合があるという意見が多く出た。またじゃんけんで決める場合は、誰がやっても結果が同じで、関わりが短期間のものにした方がいいという意見が話し合いから出てきた。

係の演説の内容は、班のポスターに記載させた。その内容について、見やすさや係の特徴が一目でわかるかなどの評価基準を考えさせ、評価対象としたので各班の工夫が見られた。

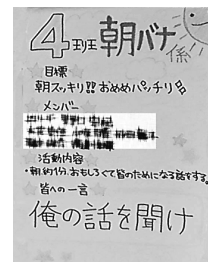


図2 話係のポスター

4-2 班討議の取り入れ方について

4-2-1 グループ討議のシラバス

グループ討議の内容は、考えの根拠を自由に話せる題目を選んだ。毎回グループ討議を入れることで自分の考えと他者との考えを比較し、様々な考え方のあることを理解してほしいと考え、シラバスに沿って下記のようなグループ討議内容を提示し、実行した。

表4 グループ討議の内容と講義のテーマ

回	講義のテーマ	グループ討論内容
1	特別活動とは何か	教育課程を給食メニューに例える
2	特別活動の歴史、学級開き、班の決定	係と当番の違いについて考える
3	他教科との関連	総合との相違点を考える
4	他教科との関連	道徳との相違点を考える
5	特別活動の4つの内容	自分の体験から考える
6	評価方法	学級活動の評価の方法
7	全体指導計画の作成	全体指導計画の具体案の作成と意見交換
8	学級活動の指導計画	学級指導計画の具体案の作成と意見交換
9	集団活動の意義	ワークショップで実体験「世界がもし100の村だったら」
10	生徒指導の3機能 エンカウンターについて	新しい班による他己紹介、構成的エンカウンター体験
11	学級活動の実際1	係の決め方についてじゃんけんは民主的な方法かを考える
12	学級活動の実際2	係活動の内容、ポスター作成
13	事例研究1	事例についての話し合い1 アスペルガーの児童に対して
14	事例研究2	事例についての話し合い2
15	まとめ、集団活動の体験	ワークショップで実体験「新貿易ゲーム」

4-2-2 グループ討議の事例1

第1回目の講義で、グループ討議のイメージを広げるために、「小学校の教育課程である『教科、特別活動、道徳、総合的な学習の時間、外国語活動』を学校給食のメニュー『ごはん、みそしる、おかず、牛乳、デザート』に例えよ。」というテーマで行った。この問題には正解がなく、理由付けがはっきりしていればよいので学生は自由に話すことが

でき、自分の考えの根拠を話す一方、他者の意見を聞いて考え方を広げることができる。

具体例で言うと、「主食は必ず必要なものであるから『教科』、特別活動（学級活動）は教科を引き立て毎日必要だから『みそしる』、牛乳は体の基本である骨を作るから『道徳』、おかずは毎回代わり、ご飯の味を引き立てるので『総合的な学習の時間』、そして甘くておいしいデザートは『外国語活動』にあてはまる」などと理由をつけて例えて話し合った。この活動は各自のオリジナリティを発揮することができるため学生は大変おもしろがった。これにより特別活動のイメージを作る事ができた。

4-2-3 班の討議の事例2

事例研究においては、子どもの集団作りをベースとする実践事例「子どもと子どもがつながるために」⁽²⁾をとりあげ、「パニックを起こすものを投げつけたりするアスペルガー的傾向を持つ児童をクラスの輪の中にどのように取り込み、人と人の関係を切り結んでいくのか」を題材とした実践事例に対して、教師の視点で話を順に読んでいき、話し合いをすることができた。ここでも体験に基づいた様々な話し合いが出、提出を求めたレポートにも反映されていた。学生は、自分の意見を人に言うことに喜びを感じ、人の意見を自分の意見と比べることで考え方を広げていたように感じられた。

4-4 アンケートの結果

以下アンケートの回答を集計した。N=50

○問1 係活動を取り入れたことは効果的だったか

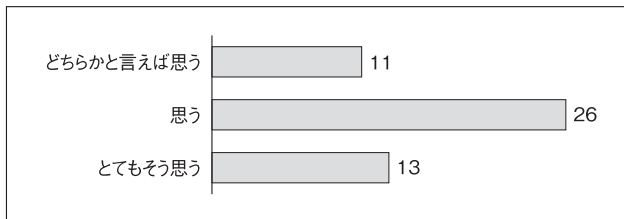


図3 係活動の有効性についての評価

3, 2, 1にあたる「そうは思わない」とする否定的評価は0件であった。係活動の有効性を学生は感じていると思われる。問2の理由については、自由記述をキーワード化して集計をおこなった。同一人物でも理由が複数ある場合は、別のキーワードとして数えた。

「どちらかと言えば思う」との評価は他の2つと比較するとマイナス評価である。その理由を見ると、係活動をする事自体よりも、他班と比べての係活動の仕事量の軽重に言及しているものが6名。マイナス評価であっても授業が進行しやすいとの理由をあげているものが3名であった。一方肯定的な評価として多い理由が授業に積極的に

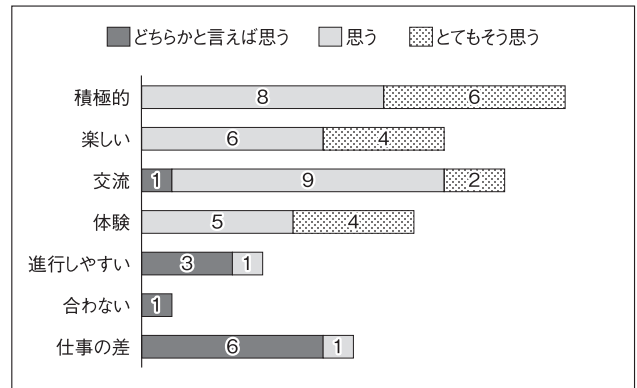


図4 係活動の効果に関する評価別理由

参加できる14名、友達との交流が楽しい12名、単純に楽しい10名、子どもの気持ちになって体験できる9名である。

○問5 今後とも授業にあったらよいと思う係は何か

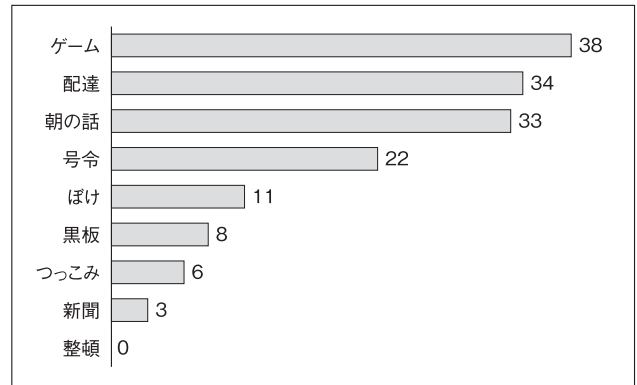


図5 必要だと思う係選択結果（1人3つ選択）

ここで、係の仕事と当番の仕事の違いについて述べる。

係の仕事は創造性があり内容を工夫し発展させていくことができる仕事。一方当番はどちらかというと管理的で全員が平等に行う仕事と考えている。毎回のゲームや朝の話は、授業を受講する学生にとっても楽しみとなっており、人気が高いのもうなずける。しかし、今回、配達や号令の仕事が必要というのは予想外であった。感想などから判断すると、配達の仕事であるレポート配りは教師がやっている時間がもったいないとのこと、号令は授業の始業のけじめがつくので気持ちの切り替えになるとのことであった。授業を盛り上げるボケやつっこみの係は残念ながら少数であった。この係はある程度の技量が必要とされるので自分がすることを考えると躊躇するのであろう。

○問6 グループ討議を取り入れた事は効果的だったか

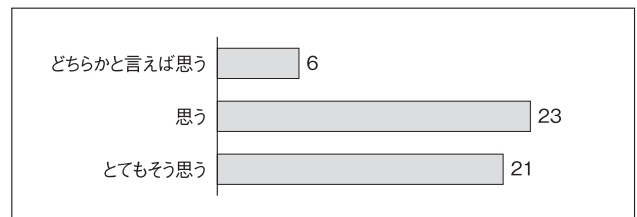


図6 グループ討議の有効性についての評価

3, 2, 1にあたる「そうは思わない」とする否定的評価は0件であった。係活動に比べて、「とてもそう思う」の評価が増えている。以下その理由について提示する。

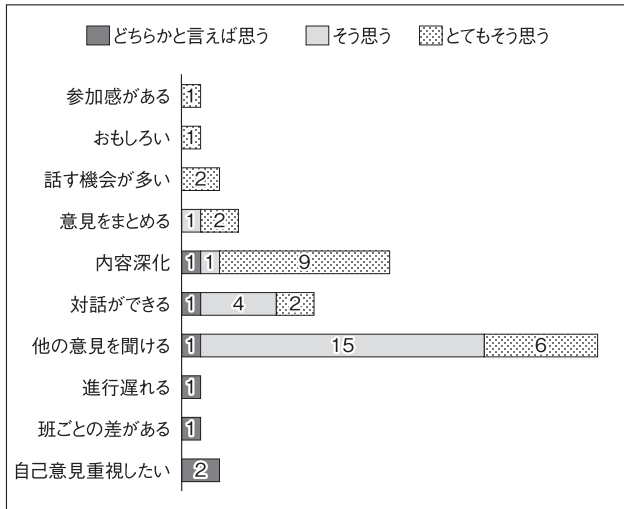


図7 グループ討議の有効性についての評価別理由

グループ討議が「とても効果的だ」と感じた学生の理由としては、話し合うことで「自分たちの今まで持っていた考えがより深化するという事をあげている（9名）、「効果的だ」とする学生は、他の人の意見を聞けることに価値を見いだしている（15名）。「どちらかと言えばそう思う」というマイナス評価の意見として「個人の意見を重視したい」という意見もあった（2名）。

大学の人数の多い授業は、教員の話聞くだけになり、個人で思考することになりがちである。しかし、聞くだけではなくてその場で自分の考えを表現すること、自分の考えがより明確になったり、相手の思考に影響を与えたりする経験は、学生の満足感につながるとされる。

○問8 講義の全体の満足度は高いか

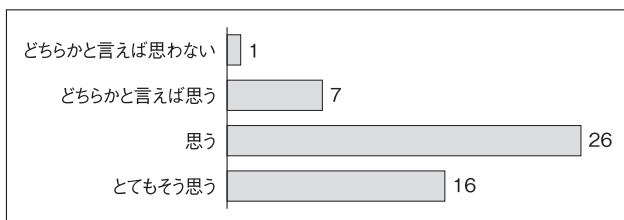


図8 講義全体に対する評価

1, 2にあたる「思わない」「まったく思わない」は0件。

○問9 毎回のレポート提出は大変だったか

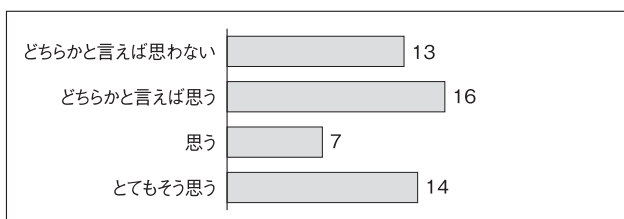


図9 レポート提出に関する評価

この授業では、毎回レポートを課している。授業全体に占める毎回のレポート評価の割合は30%。期末レポート20%、試験50%である。次の授業までには評価したレポート（3段階評価）を返却している。毎回レポートを書くことになるので、学生はもちろん大変ではある。しかし、感想からはレポート点が毎回積算されるのでやる気が出た等の意見も多かった。

4 研究の考察

講義に対する学生の満足度（図8）は、授業に対する「自己の参画感・一体感」と、「自己の意見と他者の意見を交流する場、表出の場」があったためと思われる。あわせて講義の性格上、理論の学習を補完する形で体験を取り入れる事により、小学校における特別活動を教師側の思いと共に学習者側の思いからも体験できたことも大きい。

一般に中等教育では出口として入試があり、グループ討議型の授業は難しい。ある高校では学校設定科目として「国際理解教育」の科目を設定し、試験や入試のための短期型実益的観点からだけでなく、長期の人格形成や生涯学習の観点から、学ぶプロセスを重視する評価としてグループ討論も多くを取り入れている⁽³⁾。その学校の生徒の感想として、この授業がおもしろい理由は、「自分の意見が唯一自由に言える授業である」とのことであった。

高等教育において、評価は総括的評価（最終試験）だけではなく、形成的評価をもっと行うべきであると考え。ここでいう形成的評価とは、レポートを毎回課するというだけの意味ではなく、前述の高校のように意見が言え、学習者と教員の間にインタラクティブな関係を作り、一緒に授業を作り上げる中で、そのプロセスを重視していこうという考えかたである。

OECD教育研究革新センターから「人格形成のための対話型学習」に関して興味深い提案がなされている。⁽⁴⁾ここでは生徒の形成的評価（アセスメント）は、以下の3点に視点を当てることで可能となる。第1点目「教授学習プロセスに重点を置き、生徒をそのプロセスに活発に巻き込むこと」。第2点目「仲間同士の相互の評価および自己評価のための生徒の技能を確立すること」。第3点目「生徒が自身の学習を理解し、適切な方略を開発することを助けること」の3つが述べられている。

第1点目に関しては、学生は「係への立候補、演説、採決、ポスター作り、決定後の実際の係活動」など学級活動を理解する上で必要な係活動の在り方を授業の中で体験した。特に係の決定では各自の一票が他の班の係活動を拘束するものとなる。これは前述した教授学習プロセスに生徒を巻き込むことであると考え。

第2点目に関しては、仲間同士の評価及び自己評価も必

要とされている。今回は明確な形で相互評価の形までは行わなかったが、グループ討議で各自の考えに理由を加えて述べることにより、自分の考えの整合性が試されることになる。

最後の観点では、学生が授業を通して学習課題を理解し、その解決方法を自ら考え、見つけ出すためのプロセスを明らかにし、方法として自分自身で確立することである。

このような3つの観点で授業を組み立てていくと最後の総括的評価だけでなく、プロセスとしての形成評価をする対象ができ、学生の学びをより多面的に評価することができると思われる。

今回の「特別活動の研究」の講義の方法を工夫することで以下の5点のことを達成できたと考える。

・ 小学校の教師の立場として特別活動の背景、ねらい、及

び内容を理解する。

- ・ 小学生の立場になって学級活動を体験し、授業の構成員としての参画感を味わう。
- ・ 小グループの討議によって協同で学ぶ事の利点を知る。
- ・ 毎回のレポートのフィードバックによる学習者の意欲の持続を図る。
- ・ 教員になった時に学習者を引きつける授業の運営術の紹介。

今後とも理論と実践をあわせた形での取り組みを、他の科目にも広げていきたい。また、教授学習プロセスに重点を置きそのプロセスに学生を巻き込む形での双方向性のある授業を目指したい。そして、学生とともに作り上げる授業を楽しみたいと考えている。

注

- (1) 小学校学習指導要領解説特別活動、文部科学省、2008年、P.8
- (2) 競争と抑圧の教室を変える 子ども集団作り実践シリーズ、全生研編著、明治図書、2007年、P.10
- (3) 日本国際理解教育学会第22回研究大会研究発表抄録、石森広美、日本国際理解教育学会 pp.28 2012年
- (4) 形成的アセスメントと学力—人格形成のための対話型学習をめざして—、OECD 教育研究革新センター編著、明石書店、2008年、P.29

参考文献

- ・ 特別活動研究第3版 高橋哲夫他 教育出版2010年
- ・ 子ども学級集団作り入門 全生研常任委員会 明治図書2005年
- ・ 学級を高める遊びの指導 授業技術研究所編 新田義治著 明治図書1983年
- ・ 子ども集団作り入門—学級・学校が変わる— 全生研常任委員会 明治図書2005.7
- ・ 大学教育をデザインする 構成主義に基づいた教育実践 久保田賢一・岸麿貴子 編著 晃洋書房2012.7.